

熊谷市の観光と地域経済

▼観光スポットも“あついぞ！”

毎年真夏になると、熊谷市は全国的にメディアへの露出度が高くなる。テレビなどがその日の最高気温を伝えるニュースで取り上げるからで、同市では“あついぞ！熊谷”をキャッチフレーズに市名を売り込んでいる。その熊谷市は、夏の暑さだけが名物ではなく、市内には多くの観光スポットが点在している。特に、2005年に大里郡大里町や同妻沼町と合併し、2007年には同江南町を編入して市域が拡大。それに伴って観光資源が増えて、より一層観光地として充実するようになった。

熊谷市は“平成の大合併”で県北地域では、人口20万都市を初めて実現させ、市域面積も約160平方キロメートルに広がった。市域には荒川と利根川が流れ、市内久下付近を流れる元荒川には、絶滅危惧種のムサシトミヨの生息地がある。市名の熊谷の由来には諸説あるが、既に平安時代後期には使われていたと



推測され、源平合戦で有名な熊谷直実像が新幹線の停車駅でもある JR 熊谷駅北口で観光客らを迎える。

観光資源は春夏秋冬を通じて豊富にあり、春は日本さくらの会の『さくらの名所100選』にも選ばれた「熊谷桜堤」で賑わい、夏には関東一の祇園「熊谷うちわ祭」や「熊谷花火大会」で盛り上がる。そして、秋の「えびす大商業祭」や、冬の風物詩「酉の市」では県内外から多くの観光客が訪れる。熊谷市商業

熊谷市の主な観光資源

- 熊谷うちわ祭…八坂神社例大祭のうちわ祭は「関東一の祇園」とも言われ、12台の山車・屋台が熊谷囃子とともに市街地を巡行する。最終日には、山車と屋台が至る所の街角でたたき合いを繰り広げながらお祭り広場に集結し、クライマックスを迎える。



「熊谷うちわ祭」の山車と屋台

- あばれみこし…大杉神社の夏祭りや出来島地区の夏祭りは、ともに利根川に神輿を入れる豪快な祭り。かつては、利根川の河岸場として賑わい、葛和田には今も対岸の千代田町赤岩とを結ぶ渡し船が活躍している。
- めめま菊花大会…めめま菊花会の会員が丹精込めて育てた盆栽や懸崖づくりなど、様々な菊が出品される。

- 熊谷花火大会…毎年8月に行われる荒川河畔の大火火。県内で最も歴史ある花火大会として知られている。その壮大さと華やかさは、関東一円に評判が高い。熊谷の夏を彩る風物詩の一つ。

毎年真夏の夜に盛り上がる「熊谷花火大会」



- 妻沼聖天山例大祭…奉納剣道大会や詩舞「実盛慕情」など、数多くの催しのほか、露店や植木市などで盛り上がる。年2回、春と秋に行われ、参拝客で賑わう。
- 恩田のささら獅子舞…下恩田地区をはじめ、池上や須賀広、押切などの地区には江戸時代から続く獅子舞が伝えられている。五穀豊穡や疫病除けの祈願として、季節の節目に奉納されてきた。
- 文殊寺大縁日…文殊菩薩は知恵をつかさどる仏様で、昔から学業成就祈願のため、県内だけでなく他県からも多くの人々が訪れている。文殊寺の大縁日は2月25日に行われ、この日は大勢の人たちで賑わう。

観光課によると、年間を通した入込観光客数は2010年（平成22年）で、約415万人だったという。今年はさらに増加が見込めるとのこと、その理由を妻沼聖天山の「歓喜院聖天堂」の修復が終わり、今年6月から一般公開が始まったからだと説明する。聖天山は日本三大聖天の一つで、1179年（治承3年）に平家物語で知られる斎藤別当実盛により創建され、国の重要文化財に指定されている神社。地元では福運厄除けの神として信仰され、特に縁結びの霊験あらたかなことから夫婦の縁はもちろん、家内安全や商売繁盛、厄除け開運、交通安全、学業成就などを祈願する人々が大勢訪れている。

▼妻沼聖天山歓喜院聖天堂が公開

この妻沼聖天山の本殿である「聖天堂」は1760年（宝暦10年）に再建されたもので、多くの彫刻や彩色が建物と見事に調和している

ことから、“装飾建築の到達点”とも評され、“江戸時代建築の分水嶺”だとの評価が高く、日光東照宮を彷彿させる本格的装飾建築。その精巧さから“埼玉日光”とも称されているが、再建後250年という歳月から建物の傷みが激しくなったため、2003年（平成15年）10月から“平成の大修復”が行われていた。約7年の歳月を掛けて、建物の傷みや剥落した



妻沼聖天山本殿の「聖天堂」

- **えびす大商業祭**…毎年11月に商売繁盛を祈って行われ、えびす大黒木像を先頭にした稚児行列や民謡流し、「直実ぶし」をアレンジした「ロックなおざね」で踊る「オ・ドーレなおざね」が行われる。



11月の「えびす大商業祭」で繰り広げられる「オ・ドーレなおざね」

- **酉の市**…「お酉さま」と呼ばれ、毎年12月8日に高城神社で行われる。境内には縁起物の熊手や大神宮のお宮などを売る店が所狭しと立ち並び、多くの人で賑わう。
- **だるま市**…星川をはじめ観音山龍泉寺、東漸寺、聖天山、玉井神社などで行われる市。転んでも起き上がれる七転び八起きの縁起が好まれて、広まった関東独特の正月風景が楽しめる。

- **星溪園**…竹井家の別邸として、星川の水源になっていた「玉の池」を中心に造られた回遊式庭園。1950年（昭和25年）に熊谷市に譲られ、市民の憩いの場として親しまれている。

- **平山家住宅**…江戸時代中期の建築物で、大きな茅葺屋根が特徴。土間は約40畳あり、吹き抜けの天井と相まって広々とした空間を作り出している。県内の大型農家の代表例として国の重要文化財に指定され、団体での見学には予約が必要。



国の重要文化財に指定されている「平山家住宅」

彩色を再建当時のように美しく蘇らせたもので、一般公開が始まってから大勢の観光客が訪れている。

典型的な権現造りである聖天堂は、手前の拝殿から中殿、奥殿へと進むにつれ、その彫刻や彩色などが豪壮華麗となり、次第に観る人を高揚させる造り。特に拝殿正面には、古くから中国の文化人が好んだ四芸である琴・囲碁・書・絵を題材にした幅350センチの“透かし彫り”彫刻の「**琴棋書画**」は秀逸。日光東照宮まで行かなくとも、十分に装飾建築の素晴らしさを堪能できる観光スポットといえる。

妻沼聖天山の一般公開だけでなく、製糸産業が栄えた当時の歴史に触れられる「片倉シルク記念館」や「萩野吟子記念館」、円墳では全国4番目の規模を誇る「甲山古墳」、あるいは市内を流れる星川の水源になっていたという玉の池を中心に造られた回遊式庭園の「星溪園」など史跡も豊富だ。同市では、こ

うした観光スポットを楽しく巡りまわれるように観光マップを作製。訪れた観光客に無料で配布しているが、そのマップには旅の推薦プランとしてお勧めの観光モデルコースを掲載している。

それによると、観光スポットは広い市内に点在しているため、車での移動がメインと考えられがちだが、歩いて回るモデルコースもある。ルートはJR熊谷駅と籠原駅を発着点とし、市街地回遊散策コースの熊谷駅からは、まず歩いて2分の「星川通線シンボルロード」に向かい、「星溪園」を見学して「片倉シルク記念館」へと移動、そしてまた「星川通線シンボルロード」に戻って熊谷駅に帰る。

所要時間約1時間足らずだが、見学時間によって異なり、施設見学だけでも時間を取られる上、「星川通線シンボルロード」には6体のブロンズ像があり、一つ一つ鑑賞するだけでもあっという間に時間が過ぎる。寺社巡りコースの籠原駅は、「大正寺」や「徳蔵寺」、

●**宮塚古墳**…全国的にも珍しい構造の古墳で、方形の塚に円形の塚を載せた上円下方墳。もとは山王塚、お供え塚などとも呼ばれていたが、宮塚古墳の名称で国指定史跡となっている。

●**常光院**…鎌倉幕府の評定衆に任じられ、貞永式目の制定に参画した中条家長が、祖父常光らの菩提を弔うために自らの館を寺とした建物。周囲には堀や土塁が残り、中条氏館跡として県指定史跡となっている。

●**根岸家長屋門**…豪農であった根岸家の面影を残す長屋門。正面左側は振武場、右側は当時の番頭たちの帳場。庭には私塾の三余堂が建てられていたことが、屋敷の見取り図から読み取れる。



豪農であった根岸家の面影を残す「根岸家長屋門」

●**甲山古墳**…古墳時代後期（6世紀頃）に築造されたと推定され、墳丘の規模は県内第2位で、円墳では全国4番目の規模を誇る。

●**片倉シルク記念館**…片倉工業最後の製糸工場であった熊谷工場の繭倉庫を利用した記念館。121年に及び製糸業の歴史を、創業当時に使っていた製糸機械を展示して紹介している。2007年に近代化産業遺産に認定された。

●**江南文化財センター**…市内全域の遺跡から発掘された出土品を収蔵・管理している。展示室には「踊る埴輪」のレプリカや日本最古の板碑などのほか、本物の縄文土器に直接触れられるコーナーもあり、古代の熊谷を知ることができる。

●**道の駅めまのバラ**…道の駅めまのバラ園では、約300種類、1,300本以上のバラが四季の彩りを添えている。見ごろは5月11日。

●**能護寺のアジサイ**…743年（天平15年）に開山されたと伝わる能護寺には、80種類800株以上のアジサイが植えられている。「あじさい寺」として親しまれ、6月になると美しい彩りを見せてくれる。

「三ヶ尻観音山・龍泉寺」、そして「幸安寺」の史跡を回る。所要時間1時間半程度だが、このルートも寺社に興味のある人なら半日は十分に楽しめる。

車で巡るルートには、“ふるさとめぬま探索コース”と、“おおさと・こうなんよくばりコース”がお勧め。旧妻沼町を探索するコースの中にはお目当ての聖天山や荻野吟子記念館、そして“あじさい寺”として知られる「能護寺」があり、途中の「道の駅めぬま」で買い物も楽しめる。また、グライダーの滑空場もコースに含まれ、大空を舞う姿を目で追っていると時間の過ぎるのも忘れてしまいそうだ。

もう一つの旧大里町と旧江南町を訪ねるコース内には、「根岸家長屋門」や「文殊寺」などの史跡のほか大里、江南の二つの農産物直売所がある。“よくばり”と言うほど見所が多く、走行距離も約25キロに及び、ゆっくり走れば一日の観光コースとなる。これら観



星川通線シンボルロードのブロンズ像

光モデルコースは、あくまでも観光客への提案であり、それぞれが好きに市内を巡れば、驚きの発見と感動に接する機会が多くなるは

- **荻野吟子記念館**…幕末の1851年（嘉永4年）に、現在の熊谷市依瀬で生まれ、様々な苦難を乗り越えて難関の医業開業試験に合格。日本最初の公認女医として東京に「荻野医院」を開業した。渋沢栄一や塙保己一とともに埼玉ゆかりの三偉人として知られている。生誕の地に建設された記念館では、吟子が困難を乗り越えて偉業を成し遂げた足取りが見学できる。



日本最初の公認女医となった「荻野吟子記念館」

- **荒川堤防の菜の花**…3月末から4月初旬、荒川の堤防に菜の花が咲き誇り、堤防の斜面が黄色い花で埋め尽くされる。利根川や福川、和田吉野川の堤防でも菜の花が咲く。

- **別府沼公園のハナショウブ**…別府沼公園には自由広場や遊具広場、日本庭園などがあり、6月には約7,000株のハナショウブが一斉に咲き、紫や白の美しい花があでやかに咲き揃う。

- **熊谷桜堤**…江戸時代から桜の名所として知られ、その歴史と美しさから、日本さくらの会の「さくらの名所100選」に選ばれている。荒川の土手沿いに約500本のソメイヨシノが2キロにわたり咲き誇る様子は壮観。



春の行楽客で賑わう「熊谷堤」の桜

ずだ。ただ、市内の面積が広いと、徒歩での移動には1回100円で乗車できる「熊谷市ゆうゆうバス」や路線バスを併用するのが便利。

▼スポーツと映像、食で観光展開

こうした観光資源をもとに、同市では年間を通して観光客の誘致を行っているが、そのテーマに『全国に発信できる特色づくり』や『歴史再発見のまちの推進』などを掲げている。観光分野においても都市間競争が激しくなる中で、魅力のある熊谷市をいかにして発信していくかが課題だ。その上で、同市では観光客の誘致増加のための施策を展開しているが、総合振興計画の中には『魅力ある郷土をほこれるまち』にするための施策が盛り込まれている。

その施策をキーワードにすると、“スポーツ”と“映像”、そして“食”で、すべて全国に発信できる特色を持たせようと様々な取り組みを展開している。スポーツでは、国内屈指のラグビー専用グラウンドである県営熊谷ラグビー場をはじめ、運動公園やプール、グラウンド、武道館など多くの施設があり、全国規模の大会を開催。その観戦に来る老若男女をターゲットに市内の観光情報を発信しているが、今年6月には日本陸上競技選手権大会で市内を一回りする無料観光バスを会場から発着させた。観戦のついでに観光をとの試みで、「少しでも熊谷の観光名所を知ってもらい、リピーターとなって再訪してほしいとの願いから」だと、商業観光課の担当者は話す。

映像は、最近話題になっているフィルムコミッションで、映画やテレビドラマのロケ地として市内の施設や風景を提供。それを見た人たちが一度は訪れてみたい、との欲求を持たせるために積極的に取り組んでいる。市内

の様々な撮影場所や公共施設の利用に関する相談などを受け付ける窓口を商業観光課内に設置し、対応に当たってきた結果、多くの施設と駅や風景が様々な場面で取り上げられた。

代表的な撮影場所としては、廃校になっている「旧熊谷市立女子高校」が“書道ガールズ”の舞台となったほか、“20世紀少年”では「妻沼中央公民館」や「熊谷スポーツ文化公園」などが撮影場所となっている。また、“トリック3”では、「熊谷桜堤」や「坂田医院旧診療所」が撮影場所となるなど、映画やドラマだけではなくCMの世界でも使われているが、相談窓口には今年になってから問い合わせが急に多くなったと言う。

▼B級グルメ大会を初開催

食を題材にした観光施策では、熊谷銘菓の“五家宝”だけでなく、うどんやフライなどで観光客の腹を満たせる。五家宝は、店ごとによって外側の黄粉や中身の餡などが異なり、うどんやフライも多種類ある。材料の小麦が本州の市単位では一位の収穫量を誇ることから、うどんやフライの食文化が発達したようで、フライは隣接の行田市が有名だが、熊谷のフライも捨てがたい。

真夏の暑さで一躍、全国区に知名度が上がった熊谷市だが、酷暑の街という負のイメージを逆転させた観光PRは良く知られているが、この食の面でもうまく情報を発信できたものがある。“雪くま”というかき氷ブランドで、熊谷の美味しい水から作った貫目氷を雪のように削り、協賛店がオリジナルシロップやデコレーションを施している。真夏のスイーツとして全国発信でき、訪れた観光客には人気の一品となった。もちろん、市内の農産物販売所や道の駅でも、地元ならではの食べ物が堪能できる。



熊谷B級グルメ選手権で
グランプリを獲得した
焼きうどんの「熊谷ホルどん」



熊谷B級グルメ大会で人気の
“フライ”



熊谷ならではのかき氷ブランド
“雪くま”

同市では、来訪者が食べ歩きながら観光することで、少しでも長く市内に滞在し、地域経済に貢献してもらおうと、特にPRには力を入れている。観光マップに食べ物を紹介するだけでなく、市内の飲食店や食品製造企業には、常に新しい商品開発を促しているが、その一環から、今年10月に初めてB級グルメ大会を開催した。前年の「熊谷B級グルメ選手権」を発展させた大会で、この年には「熊谷ホルどん」というメニューがグランプリを獲得。現在、新たなB級グルメのメニューとして、全国にPR中だが、今年の大でも人気を博している。

商業観光課によると、「県内外からの出店もあったが、ほとんどが市内の出店で24のグルメと14の物産が集まった」と言う。当日はあいにくの雨だったにもかかわらず、約1万人の来場者があり、ほとんどの店が売り切れ状態になった。終了後の反省会として「開催当日は雨にもかかわらず、事故も無く無事終了した。これだけの規模で行うと、晴れていたらもっと大勢の人出で混乱したのではないかと反省しきり。そのため、次回開催には大会の規模を考慮しながら、駐車場の確保や会場の設備など安全上の対策をしっかり整えていくことにしている。特筆すべきは同市のグルメ大会に市内から出店したグルメは、いつでも市内各所の店で食べられるというも

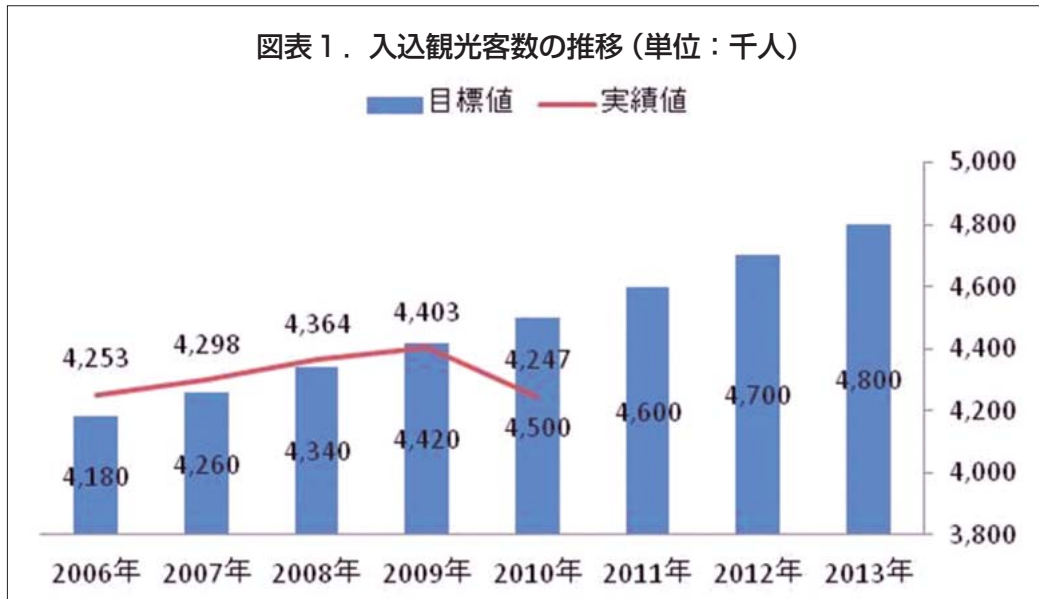
ので、大会当日だけのグルメはないと言う。

▼年間500万人誘客を目指して

スポーツや映像、食文化で観光振興を図る熊谷市。総合振興計画では、こうした取り組みで目指す成果の指標を示しているが、全国に“誇れるものの数”では、現状の50から2017年（平成29年）には70に増やすことにしている。一方、入込観光客数の目標では、図表1の通り、歴年の目標値を設定し、早期に500万人の大台に乗せることにしているが、ただ2009年からは目標値を下回る現象が続いている。今後、目標達成に全力を挙げることにしているが、問題はより精度を高めるためにデータの収集方法が変更されたことで、「少し厳しい面があるが目標通り達成させたい」（商業観光課）と、見直しは考えていない。

500万人の達成には、行政だけでなく市民や商工会などの団体、あるいは企業などの協力が不可欠だが、B級グルメ大会や「えびす大商業祭」などに見られるように、官民一体の観光振興は軌道に乗っている。街ぐるみの取り組みで際立つのは、「妻沼聖天山」を中心とした“手づくり市”の存在だ。聖天山を訪れた良き思い出となるようにと、地元の商工会が“えんむちゃん”というキャラクターを考案。それぞれ商店主が工夫を凝らした縁

図表1. 入込観光客数の推移(単位:千人)



起の良いメニューや、心づくしのおもてなしで観光客を迎えている。また、現在ある空き店舗を埋めるために、その店舗を借りて開店できるようにも取り組んでいる。

一方、JR 東日本とのタイアップで、“駅からハイキング”を実施するなど、行政と民間との連携も良好だ。この旅企画では、JRの高崎線をはじめ宇都宮線、湘南新宿ライン、両毛線、吾妻線に中吊り広告が出され、当日は多くのハイキング客が熊谷市を訪れたと言う。中でも市当局にとっては、意外だったのが神奈川県からの来客で、横浜や川崎方面から多数の参加があったことだ。「神奈川方面から来るという印象は、ほとんどなかったから」(商業観光課)で、熊谷市にとって群馬県から神奈川県までのJRラインは、最大の外客ターゲットであることを再認識させた。

▼外国人観光客の誘致が課題に

年間500万人の誘致に向けた今後の課題だが、第一に外国人観光客の取り込みだと言う。「そもそも、“どのように呼び込み、どのよ

うにもてなすか”が定まっていない」(商業観光課)というのが現状のようだ。今年の「熊谷うちわ祭」は、「平塚の七夕」や「水戸黄門まつり」とともに関東運輸局が実施した「外国人受入環境整備事業」の対象事業となり、外国人向けパンフレットの作成、インフォメーションセンターの設置、山車引きや太鼓叩きなどを体験させ、祭り参加型の外国人受け入れを実践してみたという。事業の報告書ができあがり、課題も整理されたので、来年に向け受入環境を整備していきたい、と考えている。

国内観光客の誘致面では、「市内に大きな観光となる目玉というか、核がないことが辛いところで、いかにしてリピーター客を確保するかが大きな課題」と、商業観光課では話す。その上で今後は、中心市街地だけではなく、大里・妻沼・江南各方面と周辺市町も含めた環境情報発信を進めていく方針だ。宿泊型観光地は無理としても、一日滞在型の観光地を目指し、地域経済に貢献させていくことが熊谷市にとって最重要な課題と言える。

(写真提供・熊谷市)